

opack^{オーパック}めーる

Organization for Promotion Academic City by Kyushu University



<http://www.opack.jp/>

平成18年度 財団法人九州大学学術研究都市推進機構の活動方針

当機構ができて1年半が経過しました。この間、九州大学伊都キャンパスを核とした「九州大学学術研究都市」が描く将来像や土地情報、九州大学の産学連携とその基本となる研究シーズなどを、イベントやセミナーの開催、130社余りの企業訪問などを通じて提供して参りました。また、水素エネルギー、ナノテクノロジー、バイオテクノロジー、金属加工、システムLSIなど産業化の有力な分野では、それぞれの分野の研究者や九州大学知的財産本部との連携を密にして、研究支援や企業ニーズの把握などに努めています。企業・研究所の誘致には至っていませんが、超高圧電子顕微鏡を産業界へ開放する九大初の会員制フォーラムをスタートするなど、今後に向けた着実なステップを進めています。

18年度の秋には工学系が伊都キャンパスへの移転を概ね完了します。当機構では、工学系を中心に他の学部とも連携を深め、学研都市形成に向けた様々な事業に取り組みたいと考えています。ここで18年度の主な事業、新たな事業について、当機構業務の4つの柱に沿って簡単にご紹介します。

第一に「学術研究に関する広報活動」では、海外向け広報活動を開始したいと考えています。まずは英語版のホームページやパンフレットの作成と活用が中心となります。また、九大有力シーズのデータベース構築とその情報発信も進めていく予定です。

第二は「共同研究による研究開発支援」です。九大発のID管理システムを搭載したICカード・携帯電話による「情報基盤と新ビジネスモデル構築実証実験」や、

水素特区の指定を受けた伊都キャンパスで進行中の「水素利用技術プロジェクト」などを中心に進めていきます。

第三の「研究機関等の立地支援」では、これまでの大手企業地方社に加え、地場企業、大手企業本社を積極的に訪問するとともに、福岡市が伊都キャンパスの玄関口に平成20年度の開設を目指す「産学連携交流センター(仮称)」について、企業・研究所誘致の視点から運営等に関する調査を行います。同様に、福岡県や市・町が進めている前原IC南側地区を始めとした「ほたる(分散型地域核)」についても、企業誘致と連動した開発手法等を調査し、企業が求めるリサーチパークづくりを支援して参ります。また、企業関係者の方々に学研都市への理解を深めていただくために「ほたる」開発予定地の現地説明会を行いますので、多くの方々にご参加いただきたいと考えています。その他、18年度は、文科省が進めているスーパーコンピュータを核とする「先端計算科学技術センター(仮称)」の学研都市への誘致など、具体的な企業・研究機関の誘致活動を本格化したいと考えています。

第四の「産学連携交流支援」については、17年度末にスタートした「超高圧電子顕微鏡フォーラム」の会員募集とその他の大学設備の開放も検討したいと考えています。また、市や町が取り組む九大との地域連携についてもその「しくみづくり」などを一緒に考えていきたいと考えています。

当機構の活動にご理解をいただき、世界に冠たる「知の拠点」の構築に向けて、皆様方のさらなるご支援とご協力を心よりお願い申し上げます。

- セミナー等の開催
- 東京会議の開催
- 学研都市PR用媒体の制作
(英語版ホームページ・パンフレットの作成等)
- 九大研究シーズ情報の発信
(九大有力シーズのデータベース構築等)

広報活動

立地支援

- 企業訪問
- 「産学連携交流センター(仮称)」支援
- 「先端計算科学技術センター(仮称)」の誘致活動
- 現地説明会の開催
- 「ほたる(分散型地域核)」企業誘致方策調査

- ICカードの活用調査
「情報基盤と新ビジネスモデル構築実証実験」
- 水素プロジェクトに関する調査
- その他、プロジェクトの検討・可能性調査

研究支援

交流支援

- 超高圧電子顕微鏡フォーラムの運営
- その他研究施設等運用に関する九大との連携
- 構成自治体と九大との地域連携支援





活動報告

「第1回未来化学創造センターシンポジウム」を開催

2月1日(水)東京・東京ガーデンパレスで、日本のバイオ・化学分野の研究の第一線で活躍されている先生方の講演を含めたシンポジウムを、九州大学未来化学創造センター、福岡市、当機構の共催で開催しました。

九州大学未来化学創造センターは、九州大学がこれまでに蓄積してきた応用化学、化学工学、材料工学、情報科学など広範な分野における研究成果を基盤とし、安全で快適な未来社会を築く高度な科学技術を創製するため、世界に先駆けて、未来化学の研究教育拠点を構築することを目的に設立されました。

また、センターの創立目的の一つである未来志向の産業を福岡に起こすためには、多くの企業との意見交換・協力関係がカギを握ってくるため、このたび都内でシンポジウムを開催したものです。

シンポジウムでは、「水・光・ナノテク・バイオが拓く未来化学～環境から産業まで～」をテーマとして、日本のこの研究分野の第一人者である先生方に、それぞれ「水」をキーワードに小林 修先生(東京大学)、「光」をキーワードに入江正浩先生(九州大学)、そして「産業」をキーワードに戸田雄三先生(富士写真フイルム)にご講演頂きました。



センター長挨拶 新海征治先生

さらに、「ノーベル賞候補」としてマスコミに取り上げられるなど、世界で高い評価を受けている未来化学創造センターのセンター長である新海征治先生をはじめ、片山佳樹先生、小江

誠司先生、安達千波矢先生が、バイオ・化学分野での最先端の研究について講演を行いました。

加えて、当機構企業立地サポートグループ長の山浦から、九州大学伊都キャンパスを中心とした九州大学学術研究都市の形成状況や当機構の活動状況について説明を行いました。

当日は、企業関係者など330名にもおよぶ多数の参加者があり、会場は大変な熱気に包まれました。



シンポジウム会場内

また、別会場では、26の研究テーマによるポスターセッションを行いました。ポスター前では、先生方と企業の研究者の間で、活発な議論が各所で繰り広げられるなど、充実したシンポジウムとなりました。



ポスターセッション会場

シンポジウム終了後は懇親会に移り、新海センター長の次に、福岡市の山野副市長が挨拶に立ち、福岡市が伊都キャンパスに近接して整備を計画している(仮)産学連携交流センターの話がされました。また、会場のあちこちでは、企業関係者、九大の先生方、自治体関係者、機構職員が相互に名刺交換や意見交換する姿が見られるなど、今後の産学連携の推進にとっても大いに期待ができるものとなりました。

「構想促進東京会議」を開催

1月12日(木)東京・赤坂プリンスホテ

ルで、「九州大学学術研究都市構想促進東京会議」第4回総会を開催しました。

鎌田迪貞九経連会長(九州電力会長)、前田勝之助東京会議会長(東レ名誉会長)の挨拶の後、有川節夫九州大学副学長からの九大伊都キャンパス第1期開校についての報告、当機構の石川敬一理事長(九電工会長)による機構の活動報告が行われました。引き続き、我が国のオピニオンリーダーである委員の方々から、「知の拠点」づくりのための方策について、貴重なご意見をいただきました。

会議・交流会を通じ、東京会議委員と地元産学官トップの活発な意見交換が行われ、九州大学が標榜する「アジア指向」の更なる充実、各拠点キャンパス間の連携、速やかな大学機能移転完了の重要性等を確認することが出来ました。



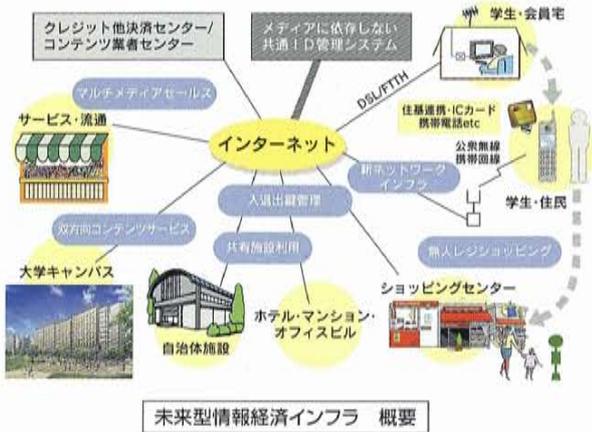
地元からは、九大総長、福岡県知事、福岡市長、前原市長、志摩町長、二丈町長ほかが出席

「九州大学学術研究都市」未来型情報経済インフラ構築プロジェクト～九州大学伊都キャンパス及び周辺地域を未来型情報経済都市に～

九州大学では、伊都キャンパス移転に伴い、大学発の情報技術により伊都キャンパス及び周辺地域からなる学研都市を未来型のビジネスモデル都市とするためのプロジェクトをスタートさせました。

本プロジェクトでは、先端の情報ネットワークを施設し、そのネットワーク上に新たなID管理や決済システム等の情報経済インフラを構築するとともに、このインフラを利用した新しいビジネスモデル実験が予定されています。

17・18年度では、次世代情報技術として九州大学システムLSI研究センターが開発したMIID(Media indepen



- (4) 対面サービスの無人化とそこにおける権限管理・個人情報管理実験
 - (5) マルティメディア コミュニケーションツールを活用した対面サービスの非対面化実験
- 当機構も、推進メンバーとして、本プロジェクトに参画しています。

くりをソフト及びハード両面から検討し、学生や学内外の研究者の生活・研究の場となる「大学門前町」のあり方を探るもので、当機構も企業誘致の面から検討メンバーとして参加しています。

調査では、地元住民と九州大学の学生が参加したワークショップの実施、九州大学をはじめ、九州大学同様に統合移転を実施した広島大学、今回の調査を選定した内閣官房都市再生本部事務局などからパネリストを招き、地域と大学とのつながりをテーマとしたシンポジウムを3月11日に開催するなど、大学と連携した魅力あるまちづくりの実現に向け展開中です。

dent ID control System)と呼ばれるメディアに依存しない、個人情報保護と権利権限・セキュリティ強度の柔軟な管理が可能なID管理システムを利用し、学生・教職員証や住基カード、携帯電話を媒体として採用した次のビジネスモデル実証実験を行う予定です。

- (1) 学研都市を構成する自治体と大学の異なる管理体系下にある施設の相互利用可能性を探る実験
- (2) ソフトウェアの鍵を利用した建物等のドアの入退出における権利権限の管理実験
- (3) 双方向コンテンツの提供、情報管理、課金実験

学研都市情報

平成17年度全国都市再生モデル調査(前原市北部地域)－「大学隣接集落地区における新しい学民連携の確立と門前町の形成」

前原市は、平成17年度全国都市再生モデル調査として、「大学隣接集落地区における新しい学民連携の確立と門前町の形成」の調査を行っています。伊都キャンパスに隣接する前原北部地域において、大学と地域との交流連携施策と、それらを実施するためのまちづ



地元ワークショップにて
(学生による住宅基本設計の発表)

九州大学学術研究都市とは？

● 巨大な実証実験の場

九州大学は、21世紀のキャンパス像として、伊都キャンパスを、研究成果の実証実験の場としての活用を進めています。現在、新エネルギーである水素の利用促進のための技術開発及び社会利用を目指した研究、九州大学で開発した個人認証システムを実装した全学共通ICカードでの建物管理、証明書発行、図書館在庫管理など遠隔教育及び研究環境の構築を目指した研究等が進んでおり、学術・実用面での実証実験の場となっています。

これらの成果は、キャンパス内に止まらず、広く社会に応用できることから、伊都キャンパスを中心とした新しい学術研究都市づくりを進める当地域にとって魅力的なものです。現在、当地域では、九州大学、周辺自治体、各分野の事業者及び当機構により、前述した個人認証システムの実証実験のフィールドとして、社会システムやビジネス展開の可能性、モデル構築の検証を行っています。

今後も、九州大学学術研究都市は、九州大学の優れた

研究成果の有効な実証実験のフィールドであり続け、更に、これら実証実験の成果が広く社会に還元されることで、文化創造の一端を担う世界に冠たる学術研究都市を目指していきます。



九州大学学術研究都市構想の将来イメージ(2005年・機構作成)

自治体からの報告

Report from municipality

二丈町

九州大学学術研究都市構想の実現

九州大学学術研究都市構想における「分散型地域核“ほたる”」は、九州大学に関連する研究機関や産業機能、さらに新たな居住の受け皿として機能展開するもので、糸島地域の「自然農業保全・共生ゾーン」を中心に自然、景観等、地域の環境と共生した整備が必要になります。

二丈町は、西九州自動車道、J R筑肥線などの交通アクセスが整い、福岡市の都心部まで車で30分、電車で45分という利便性を備えています。

このような、交通環境を活かし、学研都市構想の戦略である「知・住・悠の舞台となる快適空間の形成」に向けて、二丈町は自然環境とマッチした九州大学関連の研究機関、企業、居住空間の誘致に取り組めます。

九州大学とまちづくり

本町では、第4次二丈町長期総合計画の将来像を「G・E・N・K・Iで笑顔のある協働の夢タウンにしよう」とし、“協働のまちづくり”を積極的に進め、行政と住民の皆さんの責務と役割を明確にしながら、一体となってまちづくりを進めています。

このコンセプトを踏まえて、都市計画マスタープラ

ンの将来像である「健康で安全・安心な暮らしができる快適環境のまち」の実現に向け、九州大学の知の拠点と連携した施策を展開し、町民と九州大学の距離を縮めた元気あるまちづくりを推進します。

また、糸島地域においても九州大学と「九州大学の持つ知的資源の活用」「住民と大学との交流の推進」「伊都キャンパス周辺等のまちづくり」の実現に向けて連携・協力を行うことにしています。

企業誘致の優遇制度

二丈町は、産業の活性化や雇用の場の創出など、町全体の活性化を図るため、積極的に企業誘致に取り組んでいます。

企業誘致を推進する対策として、工場等設置奨励に関する条例の制定により、企業進出に対する固定資産税の課税免除や工場等用地の斡旋、道路又は水路等の工場等に必要の協力などの優遇措置を整備しています。



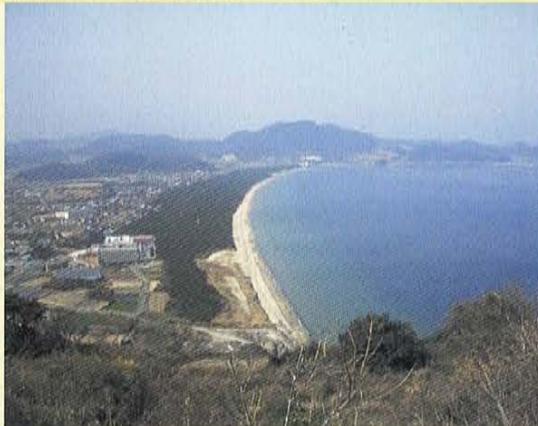
シリーズ 糸島の自然と歴史・文化

第4回 毘沙門山と 元寇防塁

伊都キャンパスから東南の方向、即ち都心側を見ると急峻な荒々しい岩壁の毘沙門山(177m)が目につきます。この山名は栄西禅師が創建したと云われる山頂の毘沙門堂に由来しています。ここからの眺めは素晴らしい。玄界島、志賀島、能古島、都心のビル群、糸島平野、今津干潟、糸島富士と云われる可也山そして伊都キャンパスとぐるりと雄大な展望が楽しめます。麓には第1次大戦のドイツ兵捕虜が建設従事した「元寇殲滅之处」と記された大きな石碑があり、ここから山頂までコンクリートの道が整備してあります。

眼下の今津海岸の白砂青松の中には蒙古軍の再襲来に備えて築かれた石塁が約200mにわたって残っています。当時は博多湾一帯の今津～香椎まで20kmに及んだもので、蒙古軍も弘安の役にはさぞや驚き、苦戦を強いられ、上陸は不成功に終わったようです。その石塁も歴史的役割を終え、長い年月の間に寸断削平あるいは砂に埋もれ、今は少しが散在

(ご案内と写真提供:糸島ふるさとガイド)



毘沙門山から見た今津松原

する程度です。その中において、今津の石塁は当時の石築地の趣を残すもので、松梢を流れる風の音や潮騒に九州御家人や鎌倉武士の緊迫した息使いが聞こえてくるようです。この困難を救った石塁を“元寇防塁”と名付けた人は九州帝国大学医学部病理学講座の初代教授、中山平次郎博士(1871～1956)です。医学研究の傍ら、北部九州の考古学分野を主体に多大な足跡を残し、その研究論文は160報を数え

ると言われています。

この元寇防塁跡から毘沙門山まで、時空の流れに思いを馳せ、海岸沿いの田園風景を楽しみながら散策をなさっては如何でしょうか。

元寇防塁跡

